

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520647

研究課題名（和文）

学習者視点にたった英語授業と学びに関する研究

研究課題名（英文）

Classroom Practice and Learners' Self-reports of Learning in English Classes

研究代表者

名部井 敏代 (NABEI TOSHIYO)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20368187

研究成果の概要（和文）：

本研究は、英語学習者の「学び」を、彼らが参加する英語授業と関連させて分析し、授業内で観察される指導法と学習者の学びの質について理解を深めることを目的として行われた。研究の結果、学習者は文法や語法よりも意識に残りやすい語彙や発音に注意を払う傾向があること、授業直後であっても意識に残り報告できる「学習事項」には、学習者の間で個人差が大きいこと、学習者それぞれの学習動機や言語に関する問題意識や言語的認知力の違いが「学び」の報告事項項目数の個人差に影響している様子がうかがえることが分かった。

研究成果の概要（英文）：

This research aimed to deepen our understanding of the relationships between teaching/classroom practices and L2 learning in the classroom. The research revealed that learners are likely to pay attention to lexical and phonological items more than syntactic or pragmatic items dealt in class, which is probably because lexical and phonological items are handy unit for L2 learning; learners' reports of uptake (i.e., items the learners claim to have learned) are quite idiosyncratic; the individual differences in reports seemed to be related to the differences of individual learners' L2 learning motivation and/or metalinguistic awareness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語学習 学習者報告 アップテイク (uptake) 気づき

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第二言語教育研究および第二言語習得研究の分野における「教室内インターラクショナル研究」の流れに属するものである。この研究では、教師と学習者間の授業内対話が、どのように学習に寄与しているか解き明かすことに焦点を当てている。談話分析の手法を応用した調査では第二言語習得に寄与する要因の検証が行われ、インプットやフィードバック、アウトプットの重要性が実証されてきた。しかし、事前・事後に行われる学習者の能力測定による学習評価は、「学び」の過程を知るデータとして不十分であるという認識が生まれ、学習者の視点にたった「教室内インターラクショナル研究」に対する関心が高まっている。

関係する先行研究とその結果

研究代表者は、1999年から「教室内インターラクショナル研究」でテーマになっていたリキャストと呼ばれる教師のフィードバックに関する研究を行ってきた（“Learner awareness of recasts in classroom interaction: A case study of an adult EFL student's second language learning.” (Merrill Swainとの共著) *Language Awareness*, 11 (1) pp. 43-63. (2001.04.); *Recasts in a Japanese EFL classroom*. 関西大学出版. (2005.10.))。この研究で、学習者によるフィードバックの受け止め方は多くの場合各自異なっており、教師のフィードバックが学習者全員に対して一律に効果があるのではないことが明らかになった。この研究は、教室内でおこる教師のインプットやフィードバックが学習者全員に同一・同様に受け取られるという想定から脱却する必要があることを明らかにした。また質的分析を行った学習者視点のデータから、学習者が主体的に「学び」の資源を教室内インターラクショナルに見出している様子が伺われ、学習者視点にたった研究を充実させる必要性と、学習者の主体的な「学び」（または知識構築の過程）を調査する必要性を示した。

本研究が参考にしている学習者視点に立った「教室内インターラクショナル研究」のひとつに、Slimani (1992)の研究がある。彼女はアルジェリアの大学1年生対象英語授業における学習者の「学び」を、授業中の対話と関連づけて分析し、学習者が自主的で独立した意識をもって授業に臨み、

各自が自らのニーズにあった「学び」をしている一例を示した。一方、Slimaniと同様の手法を用いて行われた Palmeira (1995)の研究では、文法項目に焦点を当てた授業で、教師がもつ指導目標と学習者が学んだと報告した項目が一致する傾向があることが報告されている。これらの研究結果は、研究対象となった授業が文法に焦点をあてたものだった。外国語授業には文法以外に言語運用技能(例えば講読や作文)に焦点をあてたものもある。これらの授業における学習者の「学び」についても調査をする必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語学習者の「学び」を、彼らが参加する英語授業と関連させて分析し、授業内で観察される指導法と学習者の学びの質について理解を深めることにある。教育における授業と学びの関係についての探求は、重要な研究テーマのひとつである。学校教育では、授業は学習者の「学び」を促進する貴重な場であるが、行われる授業とそこに集まる学習者の学びの関係は、決して直接的ではない。教師の関心は、授業に用いる教材や指導法に向けられることが多いが、入念に準備された授業が必ずしも学習者の学びを保障するわけではない。「でも、これ、前回教えたのに！」という教師の叫びは、英語教師にも無縁ではない。

学習者の「学び」は、与えられた情報や体験を通じた知識の構築過程そのものといえる。学習者の内面で「学び」が実現されているかどうかの調査にあたっては、学習者の視点にたったデータ収集が必要となる。Slimani (1992)が行ったように、学習者対象の半構造質問紙によって、学習者自身が報告する「学び」を収集する一方、個別面談調査でより深く学習者の意識に関するデータを収集して、学習者が体験した授業実践の特徴と学習者が学んだと自覚する事柄との関係について調査したい。

どのような授業実践が、どのように学習者に受け止められ、どのような「学び」がそれぞれの学習者の内面で起こっているかを調査することは、より質の高い授業を提供したいと希望する教師にとって役立つ情報を集めることになる。

本研究を行う意義は、二つある。まず、談話分析手法を応用した日本の学校教室内のインターラクショナル研究の拡充であ

る。「コミュニケーション能力育成」を掲げた学習指導要領の施行や『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』の奨励で、中学校や高等学校では英語の指導法に変化が起きていると考えられるが、具体的な授業展開を知る資料は十分とはいえない。第二言語教育を向上させるために、現職および未来の英語教員に授業実践の例を提供するためにも、実際の教室でインターアクション・データを収集した研究は必要だと考えられる。

次に、第二言語習得および英語教育法における理論に基づいた、日本の英語教室と授業法の検証である。第二言語習得および英語教育法では、教師によるインプット、フィードバック、および学習者のアウトプット活動の重要性が主張されている。よって、これら理論上優れた指導法・学習活動法とされるものが、学習者が「学んだ」と自覚する事項・内容が授業で取り扱われた際の教授法で生かされていたかどうかを明らかにすることを通じて、日本の学校英語教室での実践や導入されている学習活動に不足するものをあぶり出すことができると考える。どのような授業実践が、どのように学習者に受け止められ、どのような「学び」がそれぞれの学習者の内面で起きているかを明らかにすることで、より質の高い授業を提供したいと希望する教師に役立つ情報を提供できると考える。

3. 研究の方法

本研究は、大学1年生および2年生対象の英文読解を主目的にした英語授業で行われた。研究に参加したのは法学部、文学部、経済学部、商学部の学生で、授業を担当した教師は2名である。

調査は、2009年度春学期の英語コース2クラスで2回、および2010年度秋学期の英語コース3クラスで3回実施された。2009年度の調査は2010年度の本調査の予備調査であった。

調査対象の授業は、教師の許可を得て普段通りの授業の様子をビデオ撮影した。カメラは教室の一角に固定し、学生と教師のやり取りをそのまま撮影した。授業終了時間10分前に、受講生に対して質問紙を配布し、当該授業で学んだと思うことを全て書き出すよう指示した。

2009年度の調査で用いた質問紙はSlimani (1992) が用いたフォーマットで、事故報告をする項目は「文法」「単語やフレーズ」「スペリング」「発音」「文章表現・英語的な表現や

使い方」「その他」であった。2010年度の調査では、もう少し深い内容の報告を求め、Mackey (2006) のフォーマットを用いた(表1参照)。

表1 Uptake Claim 質問紙

気づいたこと	(種類) ・語彙文法 ・単語 ・発音 ・スペル ・話の内容 ・その他	(意識した時) ・教師説明 ・クイズ ・暗唱練習 ・書き取り ・分からない ・その他	(新規度) ・全く知らなかった ・聞いたことはあった ・知っていた
(例) <i>What looked like a large car</i> …の <i>what</i> の使い方	語彙文法	教師説明	知らなかった

さらに2010年度は呼びかけに応じた20名を対象にインタビューを行った。インタビュー秋学期終了後に実施され、授業時間内の各種活動を自らの英語学習の方法としてどのように評価していたか、またアウトプット活動時に何に注意を払っていたかを述べてもらった。

収集した教室内の活動とインタビューは、文字化した。学生の質問紙データとインタビューデータはNVivo (Version 8) でコード化分類した。また、教室内の活動は、教師の発問やフィードバックの種類と頻度をコード化・分類した。

4. 研究成果

学習者の「学び」の報告

有効質問紙回答79名分のデータで、コードされた報告項目は258項目(のべ262件)だった。報告された項目の種類は、(a) 語彙(例:「rationの意味」「jail = prisonが同じ意味」)、(b) 発音(例:「warの発音を意識した」「northのth」)、(c) 文法(例:「人 feel excited, 物 is exciting」「defend against」)、(d) スペル(例:「fightingも fightenと書いてしまった」「authorのつづり」)、(e) 内容(例:「アメリカにも配給制や空襲への対応策があった事」「ワカツキさんの複雑な心境」)、(f) 方略(例:「意味のかたまりで読むこと」「物語を想像して読む」)、(g) 雑学(例:「戦争の背景・知識」「黒人部隊と白人部隊について」)の7種類であった。(表2参照)

表2 報告された項目とその件数

報告された項目の種類	数	%
語彙	113	43.8
発音	72	28
文法	38	14.7
スペル	5	1.9
内容	17	6.6
方略	4	1.5
雑学	9	3.5
合計	258	100

学習者1人ずつ個別の項目記載が多く、同一の授業を体験していても、学習者が報告する「学び」はそれぞれ特異であることがわかる。

そのなかで、パターンとして顕在化するのは、語彙と発音に関するエントリーが多いという事である。

学習者の学びの報告の特徴と傾向

報告された学びの項目が意識された授業活動の関係については、以下のことが判明した。まず、教師の説明で取り扱われた語彙、発音、文法に関する事項について報告されることが多い。次いで、スペリングについての報告は、書き取り活動など間違えた時に意識したケースが多い。

表3 授業中の活動と報告された項目

	語彙	発音	文法	スペル
教師説明	29%	38%	66%	0%
クイズ	26%	19%	5%	20%
書き取り	6%	3%	13%	40%
暗唱練習	5%	12%	5%	0%
その他・分からない	34%	28%	11%	40%

SLA理論のアウトプット仮説によれば学習者の気づきはアウトプット活動の際に高まると考えられている。そのため、アウトプット活動（書き取り活動と暗唱練習）が取り入れられた授業で学習者に学びを報告させた。これらアウトプット活動は、確かに語彙、発音、文法いずれの項目の報告にも多少は関係しているが、仮説が示唆するほど、学びの直接的なきっかけになっている様子はない。むしろ、学習者は教師からのインプットを知識のリソースとしている傾向があることがわかる。

学習者個人の成功への方略

学習者は、これまでの学習経歴から形成された個人的な学習方略と課題に照らし合わ

せながら、授業中の学習活動に意味付けをしていることが分かった。高校時代の英語学習経験、そして大学で同時に履修している別の英語のクラスや第二外国語の授業での経験も、当該の授業で行われる学習活動を理解する枠組みとして用いられている。

質問紙調査では授業中の活動は主にインプット主体の活動とアウトプット主体の活動に分けて分析されたが、インタビューデータで顕在化したのは、グループワークという形態と教師に対して一方的に英語を使ったコミュニケーションを実践する形態で、対応の仕方や学びの受け取り方が異なる事である。学習者同士が自らのペースと問題意識を持って活動するグループワークは、能力の自己判断の機会になっていたこと、パートナーと協力することで、一人ではできなかったことができる Scaffolding 機能があったことが分かる。一方、暗唱や作文の活動は、教師の評価が直接的であるため、より高い評価を得るための方略を駆使することが判明した。

インタビューでは、授業内での活動課題の種類（リーディング授業内での書き取り活動や暗唱練習）によって、当該の英語リーディング授業の最終目的が総合的な英語能力育成にあると学習者が推察していたことが明らかになった。（インタビューデータを収集しなかった年度に、読解方略を意識させる発問が多くあった授業後の学習者報告に、読解方略を報告している例と結びつく。）

本研究では、長期にわたり大量の Verbal データを収集する事になった。学習者の学びの報告もインタビューで述べられた学びの経験も複雑で豊かな情報を持つデータである。研究予定期間内で十分な分析ができたとは言えず、今後さらに角度を変えて分析する必要があると言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

①名部井 敏代 「大学生学習者による『学びの報告』：英語授業中の活動と気づき」 外国語教育メディア学会第51回全国大会、2011年8月8日、名古屋学院大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名部井 敏代 (NABEI TOSHIYO)
関西大学・外国語学部・准教授
研究者番号：20368187

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

様式 C - 1 9

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書